親子の相互援助関係の実証分析
きょうだい構成に着目して

苫米地なつ帆（大阪経済大学）

１．問題設定と背景

親世代と子世代の関係性は家族社会学の重要なテーマのひとつであり、多様な視点から研究が蓄積されてきた。そのなかでも世代間の援助関係については、子世代から親世代への援助の対称性・非対称性やその規定要因について数々の実証研究がおこなわれてきた（施ほか 2016；岩井・保田 2008 など）。たとえば施ほか（2016）では親への経済的・非経済的な援助が伝統的な規範的拘束というよりは日常的なニーズにもとづくものに変わってきていること、いずれの援助についても親からの援助を受けている場合に子世代が親への援助をする傾向がみられることなどが指摘されている。

上述のような世代間の援助関係にかんする研究においては、親子関係、きょうだい関係といった家族員間の関係性や、親世代、子世代それぞれのライフステージ、個々のライフスタイルのあり方など考慮すべき要因が多岐にわたる。それゆえに、援助関係の全体像を把握するのと同時に、個別の要因について詳細に検証することでそのメカニズムを解明することが肝要になってくる。

そこで本研究では、全国家庭動向調査の特長を生かして子世代のきょうだい構成が親子間の援助関係にどのような影響を与えているのかに焦点を当てた分析をおこなう。子どもが複数いる場合、子から親への援助は「きょうだいのうち誰かがおこなっている」場合や「きょうだい全員がおこなっている」場合、あるいは「誰もおこなわない」場合などが想定される。親から子への援助についても同様である。そのようなパターンが親世代および子世代の属性と関連しているか、時代的な変化がみられるかを検討することは、親子関係やきょうだい関係のあり方そのものの特徴をとらえるにとどまらず、社会保障や社会福祉のあり方を再考する一助となりうると考える。

２．データと方法

分析には第３回（2003）～第６回（2018）までの全国家庭動向調査のデータを用いる。本調査では、回答者に 18 歳以上の子どもがいる場合に、少なくとも上から３番目までの子どもとの相互援助の状況が尋ねられている。子世代の一人ひとりと親である回答者のかかわり方を明らかにできる点で、本調査は非常に貴重なデータである。用いるおもな質問項目は、回答者が子どもにした経済的援助・子どもから受けた経済的援助の項目や、非経済的援助（手助けや世話）の項目である。はじめに援助・被援助の関係についての実態を明らかにしたうえで、その関係性が子どもの属性（性別や出生順位、それらの組み合わせによるきょうだい構成）や同別居の状況によってどのように異なるのかについて検討する。

３．結果

記述的な分析においては、出生順位が早い子どもの方が親と相互援助の関係性にある比率が高いこと、近年ほど相互援助の状況にある親子の比率が高いことが示された。また、長男よりも長女の方が、実親との相互援助関係が形成されやすいことも確認された（いずれも経済的な援助・被援助についての分析）。他の要因を統制したうえでのきょうだい構成の影響など、詳しい分析結果については当日報告する。

参考文献

岩井紀子・保田時男，2008，「世代間援助における夫側と妻側のバランスについての分析――世代間関係の双系化論に対する実証的アプローチ」『家族社会学研究』20(2): 34-47.

施利平・金貞任・稲葉昭英・保田時男，2016，「親への援助のパターンとその変化」稲葉昭英・保田時男・田渕六郎・田中重人編『日本の家族 1999-2009――全国家族調査[NFRJ]による計量社会学』東京大学出版会，235-257.

キーワード：親子関係、きょうだい構成、世代間援助